

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター (JVC)

中東 緊急支援と平和活動

Trial&Error

臨時号 No.232
(2003年6月30日発行)

JVCは91年にイラクで、92年からはパレスチナで人権・平和活動を続けてきました。今回のイラク攻撃の緊急事態に対し、新たにイラク、ヨルダンで人道支援活動を開始しました。

ヨルダン

イラク難民 マタニティサポート

ヨルダンでは30万人近くのイラク難民の人々がいます。彼らはまだ帰国できる状態ではありません。JVCは看護師を派遣するとともに、お産にかかる費用の一部を負担します。

イラク

1 緊急医療支援

攻撃により多くの病院が破壊されている中で、JVCは「母子保健病院」や、市内の診療所、新たに開設されたクリニックに、医薬品や外科消耗品を支援しました。

支援物資：抗生剤、脱水した子どものための点滴、ビタミン剤、軟膏、消毒液、外科用手袋、ガーゼ、包帯など

3 緊急食料支援

今回の攻撃で、特にストリートチルドレンや貧しい家族は基礎的な食事にも事欠いています。

JVCはストリートチルドレン・孤児院の施設や貧困家庭に対し、緊急の食料を配給しました。

配布食料：缶詰類（豆缶、ツナ缶、ビーフ缶）お茶、トマトペースト、豆ペースト、ジャム、マカロニ、タオル、洗剤など

パレスチナ

1 難民キャンプ平和図書館 (ベツレヘム)

図書館の改築工事が終了。新しくなったセンターは多目的ルーム、トイレとミニキッチンつき。早くも放課後には子どもたちで賑わっています。今後も絵描き、楽器演奏、踊りなどのプログラムを充実させていきます。

2 教育・文化復興の支援

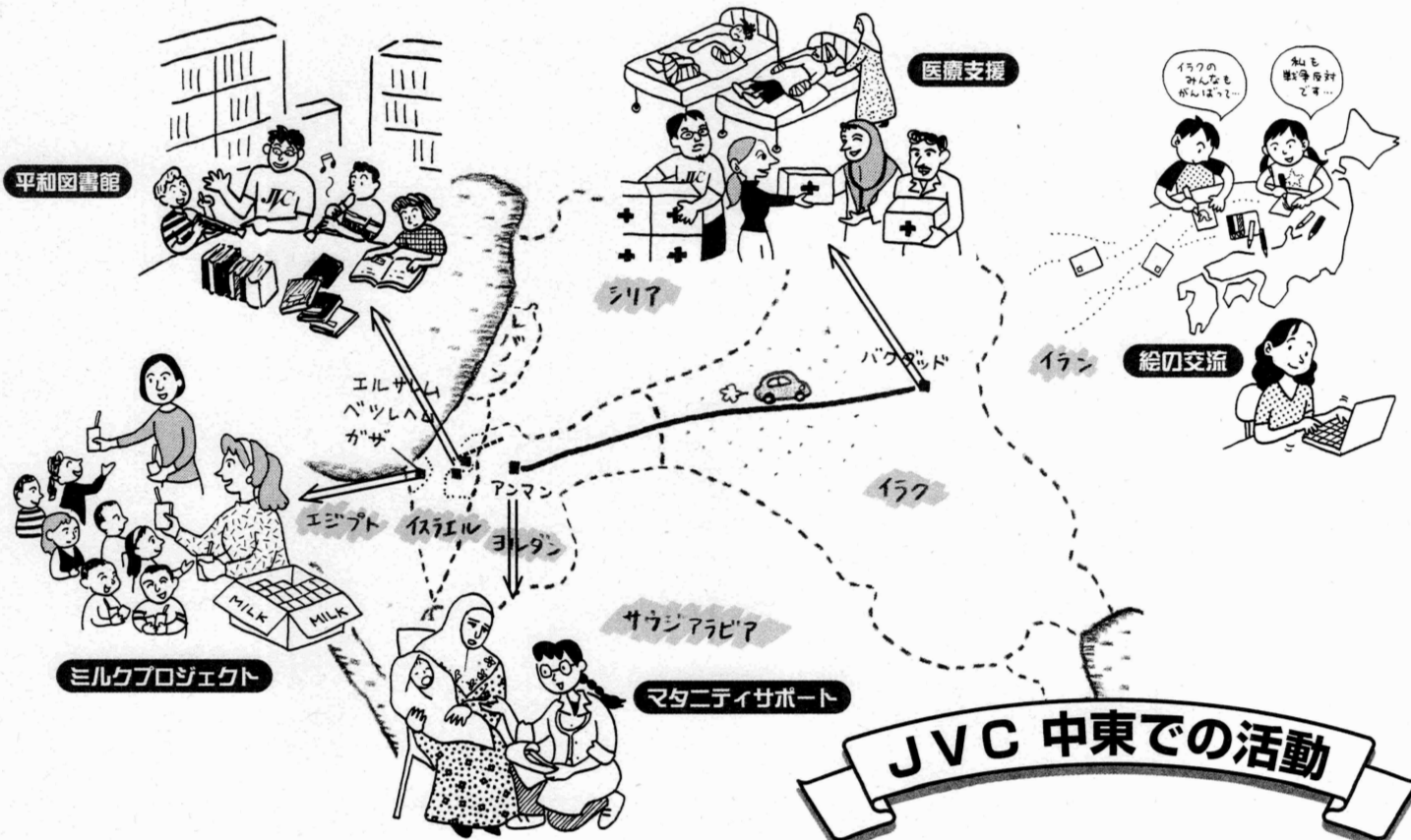
子どもたちの憩いの場である児童館、文化音楽学校などが空爆や略奪で破壊されました。これらの施設の復旧と、地域での教室活動を支援。新しい平和の文化を築けるように支援します。

4 イラクと日本の子どもの 絵の交流

JVCは昨年、イラクの子どもと日本の子どもとの平和交流を続けています。日本の子どもたちからの絵とメッセージをスタッフが現地に届け、バグダッド市内のギャラリー「ペイト・イラク」に展示しました。「戦争はやめて」「元気でね」「がんばって！」—イラクの子どもたちが励まされています。

2 ミルクプロジェクト (ガザ)

失業率80%、貧困と栄養失調が深刻化しているガザ地区で、幼稚園児に牛乳一日1パックを届けています。この牛乳はパレスチナで製造、産業の保護にも役立っています。秋からは栄養強化ビスケットの配布も計画中。



イラクに入っの第一印象は、20年前に時計を巻き戻されたような感じでした。走っている車の古さ、街の汚れと破壊、電話も電気もほとんどないに等しい生活。職業なし、収入なし。武器はほぼ全員が携帯するほど蔓延し、警察も法律もなく、夜ごと発砲の音が街に響きます。無秩序、無法状態です。フセインの圧制、10年近く続いている経済制裁、今回の米英軍による攻撃、そして略奪…それらが残した傷は計り知れません。そんな治安が悪い中で、唯一、宗教指導者を中心としたコミュニティがまとまりを保ち、最低の安定をもたらしているように思われます。

一方、イラクの復興はバグダッドを見る限り、毎日進んでいます。14日間のゴミ回収キャンペーンが始まったり、警察官

が軍隊から交差点に戻ってきたり、公共バスが走ったりと毎日着実に復興に動いていることが肌で感じられます。

バグダッドで目を引くのは、ガソリン・スタンドに並ぶ車の長蛇の列でしょうか。平均2～3時間は待つそうで、中には午前2時から並ぶ強者もいるとか。並んで買って、たぶんそのほとんどはポリタンクに詰めかえて、街角で小売して現金を稼いでいるものと思われます。

人々は皆、言います。「米軍にはすぐに出ていってもらいたい。しかし次の政権はどうなるか…、明日の暮らしは…。」(5/20)



【イラクの現状】

1990年より12年以上続いた国連の経済制裁は、湾岸戦争で破壊されたインフラの復旧を妨げ、食糧、医療物資などの深刻な不足をもたらした。イラク貨幣の価値は従来の6000分の1に低下し、イラクのGNPは劇的に低下した。また、公共サービスの停滞が著しく、水は汚染されたまま、電力などの不足もあり、それらは保健医療や公衆衛生、農業、教育、基礎的な工業生産などすべての分野に悪影響を及ぼしている。

2000年の国連の人間開発指標によると、イラクは174カ国中126位である(1991年は、160カ国中91位)。1995年には、長期化する制裁がイラク国民に与えた被害の人道上的問題をかえりみて、国連のプログラム「食糧のための石油」が導入されたが、失業や経済格差の拡大は依然として深刻である。

- 子ども人口の30%が栄養失調状態にある。(UNICEF 2002年)
- 安全な水へのアクセスは都市部において50%、農村部において33%まで低下した。飲み水の量と質の悪化は、感染症の急速な広まりをもたらした。(FAO)
- 経済制裁は百万人を超えるイラクの人びと(うち約半分が子ども)の死を招いた。(UNICEF 1999年)
- イラク女性の半数以上が貧血症、4人に1人の新生児は低出生体重児である。障害出生率や乳幼児死亡率も急激に増えた。(UNFPA 2003年5月)
- 妊産婦死亡率は、この10余年の間に、160人が370人に増えた(人口10万人あたり)。乳児死亡率は52人が108人に増えた(1,000人中)(UNFPA)

三枝成彰氏、イラクへ。 JVCの活動を訪問

レポーター 高島哲夫 (JVC会員)

太陽はどこまでも熱く、一帯はほこりっぽかった。停電のたびに、泊まったバグダッドのホテルのクーラーは使えなくなった。五月初旬、そんな苛酷な環境の中、作曲家、三枝成彰氏が日本国際ボランティアセンター(JVC)の現地調査に同行した。

JVCは病院やストリートチルドレンの施設などを支援している。三枝さんのイラク行きの目的の一つは、湯川れい子さんが開催した平和コンサート(四月末、渋谷)の収益金をJVCのこれらの活動に託すことだった。三枝さんは旺盛に街を歩き回った。米軍のピンポイント攻撃の正確さに「今の戦争は根底から変わっちゃったね。アメリカから逃げることは、もつたれにもできない」と驚いた。

病院を訪れ、クラスター爆弾で全身に重症を負った少女をいたり、内臓をえぐる傷に苦しむ少年の手を握って励ました。

日本の子どもたちと絵の交流をしている芸術学校を訪ねると略奪で荒らされた講堂にグランドピアノが残されていた。三枝さんは突き動かされるように即興でピアノを弾いた。



略奪された講堂にピアノが1つ残されていた

▼「がんばってください」 三枝成彰

日本の国がもたもたしているあいだに、どんな出かけて行き、市民の視点でサッサと働くJVCの姿を頼もしく思います。これからもJVCの活動には注目していきたいと思います。がんばってください。応援しています。



クラスター爆弾で全身にやけどをおった



芸術学校の防空壕で未来のアーティストたちと三枝成彰氏

看護師 吉野 都の バクダッド活動日記

看護師 吉野 都が4月中旬、イラク、バクダッドに入り、看護活動や調査を行いました。

子どもの下痢が増えています。

JVCが支援する「母子保健病院」は、爆風でほとんどすべてのガラスが割れ、一部壁も破壊され、病室の汚染がひどい状態でした。しかし、職員やボランティアが24時間体制で警備にあたったおかげで、略奪は避けられました。

病院は4月下旬に再開。私がこちらに着いて最初に手伝ったことは、病室の掃除。みんなで手分けして床から保育器まで掃除しました。数日たってまず妊婦検診が始まり、帝王切開も再開となりました。私は妊婦検診の手伝いをしたり、帝王切開手術に立ちあったり…。病院にあったワクチンは停電でダメになってしまい、予防接種は再開の目途がたっていません。

もう一つのJVCが支援している街のクリニックは、貧しい住宅街にあり、毎日500人くらいの患者さんがやってきます。症状はいろいろですが、特に子どもの下痢が増えているようです。水・電気は徐々に復旧してきているものの、水質が悪いからでしょう。どこへ行っても「下痢で苦しんでいる」と、親に訴えられました。

他、気管支炎などの呼吸器感染症、脱水症状なども多く、交通機関が少しずつ再開してきた程度の現状では、間に合わずに命を落としてしまう場合も少なくないようです。

他の病院でも、わずかな機材、医薬品しかないところに、さまざまな怪我、病院の患者さんが押しかけてきて、野戦病院のようになっています。そこで、なんとか現地の医師や看護スタッフがボランティアで押し寄せる患者を診察している状況です。



市内の診療所で

バクダッドの宿

私が宿泊したバクダッドのアルハムラ・ホテルには電気が来なくて、夕方の6時から夜中の12時までにはジェネレーターで自家発電していました。夜中に突然電気が消えるので、ろうそくを用意しておかなければ真っ暗で何も見えなくて、ドアに頭をぶつけたりします。水は出ましたが、コップに入れると真っ白くにこります。シャワーを浴びる分には問題ないのですが、水不足の中で、洗濯は心苦しかったので下着ぐらいしか洗えませんでした。ホテルの周りには住宅街なので、ホテルの電気がいっせいに消えると、周辺は真っ暗。満月の日は月明かりが大きなやしの木を照らして、本当にきれいでした。

さあ、病院へ

朝は8時ごろ出発。移動は一日契約のタクシーで。他に交通機関はないし、運転手のアリさんが安全を守ってくれます。アリさんは、私たちの食事を心配して、家から自家製のパンやサラダを持ってきました。途中の街道沿いでは、アリババ（略奪者：子どももいる）たちが略奪した机やイス、テレビなどを運び、アリババ・マーケット（泥棒市）が賑わっていました。燃えているビルもありました。街には両替商、どぎつい色のジュース売りの兄ちゃん、野菜を売る子どもたち…が大声で客呼びをしています。アリババも必死、普通の人も必死に日常生活を取り戻そうとしているようでした。

やつとお昼、シシカバブ

病院で看護の手伝いをしながら患者さんの話を聞いたり、JVCが支援している施設を視察・調査して、お昼を食べるのは3時か4時。たいていイラク料理の店で、サラダや羊肉の煮込みや、パン、シシカバブ（羊肉の串さし）みたいなものを食べます。



アリババ・マーケット（泥棒市）

日が暮れて… ミーティング・連絡・日記

夕方はイラクに来ているマスコミ関係の方々と会ったりします。夕食は、ヨルダンから持ってきたツナやソーセージの缶詰を開け、アリさんがくれたパンと食べたり。時々記者の方とごはんを食べることも。夜、JVCスタッフ佐藤真紀とミーティングをして、その後アンマン事務所の小林和香子に定期連絡。夜の9時くらいには仕事を終え、日記を書いたりして寝ます。

赤ちゃんはかわいい！ 疲れもふつとびます。

日に日に病院が機能を取り戻していくのを見ていると、イラクの人たちの強さを感じました。負傷した看護師さんもとって元気で「これ以上悪くなることはない」と前向きなのは心を打たれました。それに、毎日産まれてくる赤ちゃんは本当にかわいいです。疲れもふつとびます。「あ〜失敗した」=よくやる間違いは、お腹が出ている女性スタッフを妊婦と間違えること。いい感じに8ヶ月くらいなのかな、というお腹の出具合。アラブはふっくらした女性が本当に多いのです。



「母子保健病院」で
吉野 都 看護師



きょうも、新しい命が

イラクの状況の変化に合わせて、JVCの活動は続きます。どうぞ、ご支援お願いいたします。 吉野 都

イラクはバクダッド市内を中心に、非常事態から徐々に日常を取り戻しつつあるようです。状況が日々変わる中でJVCは今後、イラクで何を支援すべきか、日本人スタッフや医療関係者が次の活動の調査を行なっていきます。

「緊急救援」から「村づくり」へ 平和への長い道のり

「なんで戦っているのかよくわからないけど、とにかく難民の人たちがかわいそう。私も空爆から逃げて避難民になったことがあるから、それがどんなに怖くて大変かわかります」「いきさつは、カンボジアの戦争とだいぶ違うようだけれど、同じなのは、敵をやっつけると言って空爆を続け、一般の人々が逃げ惑うこと」。一昨年アフガニスタンへの空爆が続いたとき、カンボジアの村人たちも、小さなラジオやテレビでアフガニスタンの空爆を知り、このように私たちに語りました。

つい最近、30年にも及び内戦がやっと終わったカンボジアの人々にとって戦争は身近であり、多数の虐殺者、餓死者、難民の記憶がまだ生きていることを感じます。

JVCは1980年、カンボジアからの難民に物資配給など救援活動をおこない、その後カンボジアが復興に向かう中で母子保健や井戸掘り、自動車整備学校などの協力活動を行ってきました。現在は、内戦で失われた共同体活動の再生を手伝いながら、井戸や水がめづくりなど安全な水の供給と、自給自足のため環境を痛めない農業、「コメ銀行」「牛銀行」など村の助け合い活動を側面支援しています。



カンボジアでは農村人口が全体の約8割を占めますが、大多数の農民は天水に頼っているため、収穫はとても不安定です。毎年収穫前には家にコメがなくなってしまうが、JVCが支援する「コメ銀行」が

あるので高利貸しに頼らなくても済みます。緑肥や堆肥を使うことを学んだ村人は、日照り続きの年でもさほど不作にならずにすむようになりました。

人々にとって平和とは、「戦争がない」だけではなく、家族や村の人と健康でごく当たり前の生活を送ることができる、そういう「生活がある」ということ。では、果たしてカンボジアの人々は平和を手に入れていると言えるでしょうか。内戦は終わりましたが、それと同時に今度は大規模な開発事業や民間の投資が村にまで入りこみ、村の土地が投資対象として囲い込まれるなどの問題が起こり始めています。土地を失う人も出てきています。

貧富の差、都市と農村の格差は逆に広がってきています。村人が「自分の暮らしを自分で決め、安定した毎日を送ることができる」ようになるには、まだ道のりが必要なようです。

JVCは農業や生活改善の活動を続けながら同時に、村人たちが外からの圧力に負けず、自分たちで自分たちの暮らしを築いていけるよう、カンボジアの人々と一緒に活動していきます。農村の人々が、本当の「平和」を享受し、自立した生活を送りつづけることができるように…。

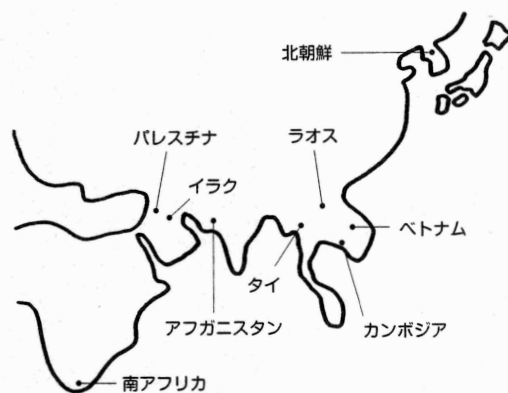


日本国際ボランティアセンター（JVC）はアジア・アフリカ・中東9カ国で、農村開発（農業、生活改善など）と、緊急救援（短期の食糧・医療などの支援）を続けています。活動歴23年、70人ほどの日本人スタッフ・現地スタッフが活動しています。

- カンボジア：農業の回復、村人の助け合い活動の支援、地域資源の地域活用、技術学校
- ベトナム：村人が森林を取り戻す活動、農業の多様化、生活改善
- ラオス：村人が自然を管理する活動、農業の回復
- タイ：地場の市場づくり、スラムの青少年健全育成
- 南アフリカ：農業の回復、学校・障害児施設の支援
- アフガニスタン：地雷回避のための教室
- イラク：緊急食料・医療支援
- パレスチナ：平和交流・子どもの支援、緊急医療支援
- 北朝鮮：子どもたちの絵の交流、太陽光パネル支援

JVCは1980年、カンボジア難民などの救援にかけつけたボランティアによって設立されました。

その後、アフリカでも救援活動を開始。しだいに、「飢えない村づくり」=農業、水、保健、生活改善、職業訓練などに活動内容をシフトさせてきました。加えて、人々が地域で安定して暮らしていけるように環境保全にも取り組んでいます。一方で広く社会や日本政府に対して政策提言を行っています。



2003年6月30日発行

発行人 熊岡路矢

編集人 荻野洋子

発行所 日本国際ボランティアセンター（JVC） 東京事務所
〒110-8605 東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル6F
電話/03-3834-2388 FAX/03-3835-0519

印刷所 三啓社

日本国際ボランティアセンター（JVC） <http://www1.jca.apc.org/jvc/>
e-mail: jvc@jca.apc.org

■説明会を行っています：第1月曜日 19:00～20:30
第2・第4土曜日 14:00～15:30

■募金をお願いします：郵便口座 00190-9-27495 JVC東京事務所